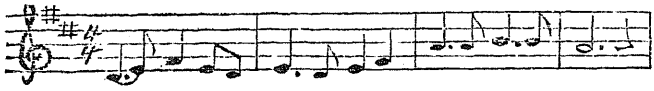
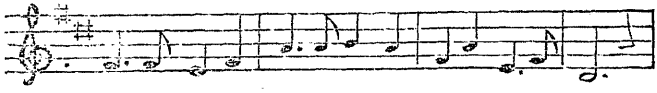
才女

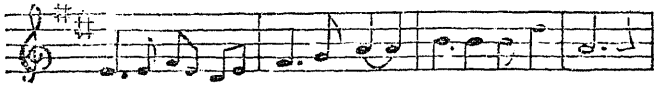
多梅稚作曲



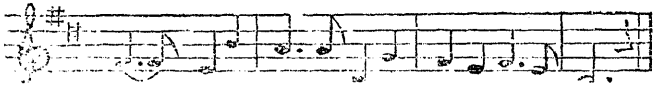
ひーとよーくひなのただならず
スーダレーカカゲテモロコシノ



たーたくつまどはざわげども
ケシキモウーカブコウロホウ



こころーはーすめるーつきかけに
タツヤークーモ平ニータカキナハ



ひーとのみちをばてらすなり
チトセノノチマデカチルナリ

才女

新保磐次

(一)
一夜水鶏の只ならず
敲く妻戸は噪げども
心はすめる月影に
人の道をば照すなり

(二)
簾掲げてもろこしの
景色もうかぶ香爐峯
立つや雲井に高き名は
千歳の後まで薫るなり

（轉載を禁ず）

後見送って玄關に出でた教師、遙に彼等の後姿をヂット見つめて居たが、遽に首をうなだれ、掌もて額を蔽うた、……左の袂より、ハンカチーフを取り出し、目を押し拭ひ、

「アー彼等の樣な、不便なものを長く世話すれば、別れの情も亦一層せつないものだ、斯る時こそ人の眞情は、顯はるゝものだ、夫れに付ても、アレが、最前の言葉の樣に、一生邪路に迷はずどうか立派な出世を……」

と低い聲で、獨り言を云ッた。

母のこゝろ

すみれ

天地の間に、生きとしいけるもの、人は更にも云はず、鳥獸に至るまで、皆母の暖かなる心に、浴せざるは、あらざるべし、さかはあれども、富める人に比べては、貧しきものゝかた、その心の切なることは、まさりてなん見ゆる。我が宿近く、車ひく事を營とせる人あり、その日そのひの、たづきにも、事缺く有樣なれば、まして三人までである、女の子の身の回はりの、とゞくべくもあらず、去年のくれ、隣なる家の兒らが、新らしき年の料にとて、調へし衣の、うるはしきを見、我子の上の思ひやられてにや、狹き心に堪へかねけん、母は遂に病の床に、臥したりき。

愚かなるに、似たれども、教へなき婦女にしあれば、さもありなんと、我はいたく心をうたれたり。

我子遠き國にあるを、故郷なる母君は、朝な、夕な、神佛に祈りて、我が爲に幸多かれとのみ、願ひ給へり、さるは雁の便りに事寄せては、怪しげなる文字にて、「びやうきせぬよう」との御言葉を、見ざるたびもなし、